
無限奇想集

δ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限奇想集

【Nコード】

N7380C

【作者名】

δ

【あらすじ】

ありとあらゆる文字列を収めた書物「無限の書」からの抜萃。通俗的な用語を使用するならば、短編集。

0: 「無限の書」のこと(前書き)

警告

- ・ つまらない可能性
- ・ 意味がわからない可能性
- ・ 作者にやる気が無い可能性
- ・ 作者が途中で飽きる可能性
- ・ ジャンルを「SF」にしたのは失敗だった可能性
- ・ 受験生がこんなものを書いてはいけない可能性

0: 「無限の書」のいふ

さて、人類というものはあんまりにも長く繁栄しすぎたので、いつしか無限へと足を踏み入れていた。たとえば、言葉ひとつとってもそれ以前、いわゆる「有限世代」との断絶が理解してもらえないと思う。いまや人類は、「ありうるすべての文字列」なるものを手にしているのだ。それらの文字列は、正式な名称は誰も知らないものの、一般の人々には「無限の書」とか、「永遠の書」なんて名前で知られている一冊の書物に収められ、各家庭の、たいていは屋根裏部屋か、あるいは押入れの来客用の布団なんかと一緒に保管されている。この世界で何を喋ろうが、それは既に「無限の書」に記されているのだ。

まあそれなりに頭の働く人ならば、そんな本にはページがいくらあっても足りない、ということに気がつくと思う。確かに「無限の書」は無限のページがあつて、もちろん厚さは無限大なのだけれど、僕ら「無限世代」の人間は、部屋に一つや二つ、それどころか無限個の無限大があつたくらいでうろたえたりはしない。それこそが有限世代と僕たち無限世代との超絶ジェネレーションギャップなのだけれど、結論から言ってしまうと僕たちはそんなことを問題にしない。無限世代の人間は往々にして有限のものを無視する傾向がある、というのもよく言われる話だが、そもそもそんな話自体がたいてい無視されてしまっている。

1..言葉遊びの非日常

＊朝食シリアス

丘の上に小さな家があった。若い夫婦に、子供がひとり。日曜日の朝八時、三人はそろって朝食をとる。牛乳にひたったシリアスを口に運ぶと三人とも途端に無口になり、思い思いに食べ終わってから話すことについて思索をめぐらす。父親は転勤の可能性について、母親は祖母の病状について、そして息子は今日が自分の誕生日であることに誰も言及しない現状について。

＊オレオ詐欺

オレオレ詐欺と勘違いして振り込んだところ、自宅に大量のOREOが送りつけられる。返品にに応じてくれない。しかたなく近所におすそ分けして回ると、「オレオの人」などという奇怪な二つ名で呼ばれるようになる。やがて自宅にOREOがすっかりなくなってしまうと、どういうわけか寂しくなり、ポケットに財布をねじこんで駆け出す。

＊エウス滝雄

『ん…、タキオ』

「え？」

『エウスタキオ。「エウウウウス！タキオオオ！」のエウスタキオ』

「逆じゃないん」

『いや、プロレスラなんだ』

「お、おう」

『で、いつもエウス被って試合出てんの』

「マジ？恥ずかしいんかな」

『まあ、プロレスやしな』

「え、で絶対エウス脱がないとか？」

『いや、結構脱ぐよ。てか試合中とかこうやって脱いでくるくる回して観客席とかに投げちゃう』

「うわー、ハイテンションやな」

『で観客もさ、ひろって持って帰ったりするんだよね』

「それ絶対家帰ってから『何でエウスなんか持って帰ってきたんやろ』ってなるって」

『あー、わかるわかる』

1..言葉遊びの非日常（後書き）

補足

エウスタキオは実在の人物ですが、エウス滝雄は架空の人物であり、エウスなどという謎の物体も存在しません。いや、存在するかもしれないけれど、耳かき一杯分さえも関係ありません。あ、エウス滝雄の本名は滝山四郎です。

2..童話的世界観

＊ねこの世界

後世どのようなシナリオが事実として語られるかはともかく、その異変を初めて異変と認識したのは、ある種のねこであった。彼らは、その独特の世界認識に基づいてそれを異変だと判断したが、その独特の行動原理に則ってそれを無視した。彼らからすれば、それは異変は異変でも、コイノボリが縄を振り切って飛び去っていった程度の異変でしかなく、したがって何らかの対処が必要だとは考えもしなかったのだ。もっとも、考えたところで、実際に行動に移すことはなかっただろう。ねこというのは、元来そういう生き物なのだ。ねこの手を借りたいときには、その点に留意する必要がある。

＊決闘

気が遠くなるほどの昔に生きていたという読心術師。彼らは時に決闘をした。互いの思考を読みあい、フレーム問題、無限ループ。結局その場に向かい合ったまま立ち尽くす。

その一部は現在でも残っており、その姿からその場所に寺門が造られることもある（東大寺南大門の物が有名）。また、TSUTAYAなどの出入口にも時々見られる。

＊電柱と私

ある晩、散歩に出た私は公園で落ち込んでいる電柱を見つけ、相談にのる。電柱の語る壮大な夢に、私はぐいぐい引き込まれていく。そのうちに電柱が、大切な何かを探しに行くと言い出す。そうして二人のあてのない旅が始まる。

＊嘘

街を歩いている時に、段ボール箱にネコが入っているのを見かける。

なんとなく近づいて、家で飼えないだろうか、などと考えていると突然声が聴こえる。

「おい」

『なんだい』

「すこしは驚けよ」

『どうして』

「だってお前、ネコが喋るか？ 普通」

『普通とか、よくわかんない』

「お前変わってるな」

「よく言われるぜ」

「お前には聞いてねえよ」

「お前には言ってるねえよ」

「五月蠅いな、喧嘩なら外でやれよ」

「ほっとけよ、キリがないだろ」

『ちょっとまって、なんか多くない？』

「ま、全部俺の作り話なんだけどな」 そういつて彼は鍵のかかっていない小窓を開けて出て行ってしまふ。わりと上機嫌らしい。あとに残された僕は、床の小皿をひろい、そういえばカップ麺に湯を入れたままだったことを思い出してがっかりする。

＊夜明け

目の前には、無限の広さの机が広がっている。無限の縁にたたずむ僕。かといって、なにも始まりはしない。しっぽのあるサイコロから、目が全部落ちてしまふ。針のない時計が鳴り響く、その時が朝の六時半、夢の終わりだ。

3.. 数学的放言集

＊無限の羊を数えるの事

「羊が一匹」

「 n 番目の羊に対して、 $n+1$ 番目の羊が常に存在する」

「 $Zzz\cdots$ 」

＊任意の鳩P

対生成によって鳩と反鳩が生じる。鳩と反鳩はそれぞれ逆の「羽ばたき」を持っている。鳩と反鳩は、平均で10〜7秒程度で別の宇宙へ逃げる。また、鳩と反鳩が衝突すると、エネルギーを放出して対消滅する。

反鳩は、鷹なのかもしれない。対称性の破れである。鳩と鷹では、もはや対等とはいえない。

＊無意味大数

ある暇人が、「なんの意味もない数」を考案する。その数はどの郵便番号でも電話番号でも会員番号でもない。そのうち専門家による審議会が開かれて、改めてその数になんの意味もないことが認められると、その数に彼の名前がつけられ、「初めて見つけた『なんの意味もない数』」として百科事典にも載るようになるが、やがて彼は自殺してしまう。葬儀にはたくさんの方がつめかけ、彼に捧げようと何人もの方がその数を暗唱する。

＊数学的パントマイム

1. まず原点を定める。空間上の点ならどこでもよい。
2. 基底ベクトルを必要な数設定する。通常、空間の次元の数だけあれば足りるが、それぞれ独立でなければならぬのに注意。

3. 最後に、方程式を定めれば壁の完成だ。このとき、式によって
は点や直線になってしまっているので気をつけよう。

＊鏡の国で

自分の鏡像体と出会う。握手をしようとして、普段どおりではうまく
いかないのではと心配し、左手を出す。しかし、彼も左手を差し
出し、結局うまくいかない。

4..睡魔と僧侶とそして無限と

*睡魔の研究

じつに睡魔というものはね、睡っている人の近くでしか生きられないんだ。

だから、もしも君が睡っていたとして、目が醒めたときに近くに誰も居なかったとしたら、睡魔は死んでしまう。かといって、近くに誰も居なかったらば睡らずに居られるか、というところではなくて、ただ睡気を感じていさえすれば、そこに睡魔は自然に発生し得る。だけど大概の睡魔は、人から人へ、夜の街から夜の街へと依り代を移動して、地球をぐるぐると周回しているものなんだ。

もう一つ、睡魔というのは、睡気を堪えている人間が大の好物で、そういう人間に出会ったときというのは、ちょうどひやりとした布団に火照った足を差し入れるような体験に似ている。だからね、修学旅行で徹夜を試みるなんて真似は、睡魔にしてみれば願ってもないような好機なんだ。それで、彼らの仲間の誰かが手掛かりを掴んだら、あとは一斉に睡魔が雪崩込んで来るというわけなのさ。

*サラウンド

5. 1chサラウンド読経システム。六人の僧侶がそれぞれ微妙に声色を変えて読経する。

臨場感アップで有り難さも倍増。何より、六人の僧侶に取り囲まれるという神秘体験。

*皿うどん

5. 1ch皿うどん。盛られた皿うどんと、小皿が五枚。そして読経を終えた六人の僧侶は皿うどんを賭けて壮絶な椅子取りゲームを始めるのだ。

＊トウキヨウ

トウキヨウトガリネズミは、次世代ロックバンド以外の何か。あなたはトウキヨウトガリネズミに関して無限の言説をつくることができるが、トウキヨウトガリネズミはその全てからちやうど1パーセントだけ離れている、すなわちそれらの言説は全て間違っている。なるだけ控えめに宣言させてもらうならば、私がトウキヨウトガリネズミである。そして、この言説でさえも、偽である。

＊二墨手

無限人の二墨手が、無限個の白球を追う。中にはエラーする者も確かに存在するはずなのに、同じく無限個ある一墨では走者はみな刺されている。整数と偶数は同じ個数だけ存在する、という事実を体現するかの如きその光景は、シニールを通り越してメルヘンチックにさえも思われた。

4..睡魔と僧侶とそして無限と（後書き）

トウキョウトガリネズミは、親指くらいのとても小さなモグラ。嘘じゃない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7380c/>

無限奇想集

2010年10月11日01時26分発行